

11・下 23	竹鼻続	竹鼻績
11・上 11	うまこそ	むまこそ
11・上 5	給び	結び
9・下 13	風稚	風雅
9・上 23	子	皇子
8・下 1	かここう	かしこう
7・下 11	辛未	辛未
13・上 19	その育まれた環境 を中心に	その育まれた文芸的 環境を中心に
7・上 2	誤	正
頁・行		

その前に東三条院詮子のところに仕えた時期があったかどうかの問題がある。後考を俟つこととしたい。

小考では文芸的環境のみに終始し、この期の齋院文芸の質の問題にまでは立入ることができなかった。併せて今後の問題としたい。(未完)

### ※追記(一七頁八行目に補入)

なおまた三六一―三六四に次の、去年の菊合せを思いやつての馬、進の贈答がある。

八日しもよりむまこそくらへしきにつけて

361 ことしさへ露はこゝろそをかれけるそのをりなりしえたそとおもへは  
かちにしかたなれば 進

362 きくのためをりしるつゆのこゝろかはすきにし秋のこゝろまさらん  
むま

363 むらさきにこかりしいろもなけれぬれはかへりかすをやつゆもをくら  
む

また進

364 いと、しくこさこそまされきくうゑにかすをきかくす露もよにあら  
し

これは七月七日、九月八日が庚申にあたっていた永観元年のことで、七月七日の女郎花合、その勝負決定の行れた九月八日の菊合を回顧して詠んだものであることが『書陵部本能宣集(五〇・二二)』の三一五の

七月七日、庚申あひたるとし、さい院にて、おみなへしあはせ、させたまふ、そのかちたる人、九月八日のかうしんに、かちまけさたむとて、かちたる人のえひければ

たなはたにくらへしあきのおみなへしかすおきそへよきくうへの露と符合することから、先学の御研究により明らかとなっている。(注1)

ともあれ『大齋院前の御集』の永観・寛和の数年間の記述の中からも、これらの初期齋院における歌合の開催を見出すことができるのである。

注1『平安朝歌合大成五』一三一九頁「別四ノ二 永観元年七月七日庚申齋院選子内

親王女郎花合」及び同書八卷、二二九七頁「別四ノ三(永観元年九月) 齋院選子

内親王菊合」の条。

山口博氏「大中臣能宣論」(『王朝歌壇の研究』村上冷泉 四編 朝陽 桜楓社) 四〇二頁

なといひて

248 こ、のへにいまはきなれぬあやころもなみたにのみやかけてみるらむ  
249 身をなけて思なかにもあやころもひとりのそてやぬれまさるらんとみえるのは、小右記寛和元年七月十八日条にみえる

伝聞、丹生使左衛門尉宣孝為和州人、被陵小舎人及従者之由言上解文  
又遣検違使云々

の事件であり藤原宣孝が丹生社に使い凌辱されて殿上の簡を削られた時のことである。

また二三七・二三八には「同月廿日住吉の御ゑうせたりとき、て」などとあって、伝えられるニュースに対しても驚きにつけ、喜びにつけ又悲しみ憂いにつけてもその感慨が即座に歌に表現されていく、いわば文芸にとけこんだ生活態度がみられるようである。

注1「さゑもんの家」(笠間書院刊影印本による)『家』は「承」の誤写か。正しくは「尉」

2 齋院の住吉物語屏風絵のことである。山口博氏に論がある(『大中臣能宣論』『王朝歌壇の研究』村上治風 四藤朝篇所収)。

## 七

以上少々煩瑣ながら齋院の日常生活について具体的にみてきた。が、なお物語司・歌司をつくり、「物語のかみ」や「すけ」など司召を行って(九二・九七)物語の浄書をしたり、春の夜「しのふる中将」が訪れて連歌をよんだり(三一六・三一七)し、文芸的遊びに打ち興じていることも見逃せない。

確かに作品は未熟なものであろうが、若き日の選子内親王を中心とした齋院の生活は、宮廷社会とは違ったのびやかな面をもち、田園に親しみ庶民の生活にうちとけ、ひたすら文芸面に集中させるといった生活が展開されていたことが知られる。こうした中に生活し、実感として自然をよみ新鮮な目で物事に対して即座に歌をよむ力が馬内侍に於ても育まれていったものと思う。

『大齋院前の御集』の、敬称のつけ方や、表現から馬内侍がその筆録者ではないかと言われることについても、なか／＼解決はむづかしいが、立場としては、なぞらえられるにふさわしいものでもあろう。

なお『馬内侍集』中には前述朝光との贈答以外に、この期の詠としてみそきの日しのひてかたらふ人々のもとより

109 うしろめた神もき、いれぬことなれは我をわする、みそきしつらん

むかしみしともたちの賀茂のまつりのしたいしにいて、かくなんまいりたるといひたれば

167 君しもあれ道のゆき、をさたむらんすきぬる人はかつわすれつ、

さふらひし人のほかなるにふみたまふとて

199 しめのうちにおなしいかきの宮ことりなれにし友をたつねてそとふがあり、一九九は選子内親王の代作と察せられる。

馬内侍は、選子齋院に何時頃まで出仕していたのであろうか。この問題については現在のところ何とも言い難い。定子に仕えるまで齋院にいたか、

御返し

391 つてにきくそてにもつゆはをきかへりのもせのむしのねにもおとらす

このむしのこをおかしかりつること、左近せうかたりければさい

将

392 つゆふかきよもきのなかにありなからむしのすみかをみぬやなになり

八月の庚申に先立つ一日行れた秋虫によせての歌合せであつたのだらう。

萩谷氏は「左右双方が負けた場合を予想して負け物をしつらえておいたのであるかも知れない」と云われる。<sup>(注3)</sup> (追記補入)

この頃は花山院の「寛和元年八月十日内裏歌合」「寛和二年六月十日内裏歌合」を始めとして「寛和二年七月七日詮子瞿麦合」、「寛和元—二年」七月七日藤壺(謁子)瞿麦合」等々歌合せや物合せが行れている。そうした風潮の一環であつたのかも知れぬが、これらの催が記録に残されていることは齋院文芸の程を知る上に貴重である。注目すべき事がらと思う。

注1 「平安朝歌合大成」 六二五頁

2 寛和元年閏八月十九日、寛和二年八月廿四日、永延元年八月廿日のいずれかか。

3 「平安朝歌合大成」 六二六頁

## 六

齋院が宮廷社会からの隔絶の感が強いとはいえ宮廷、貴族社会の一構成員であることには変わりなく大かたの世の動きにはやはりそれなりに敏感に

反応し、それがまた文芸の素材ともなったようである。その様が、『前の御集』には次のように表れている。

私の推測が誤りでないとすれば、時代の大変動であつた花山院の退位前後の不穏さを反映していると思われるものに、次の連作がある。

八月十八日のつとめてとくちをおしあけたれはきりいといみしう  
たちたり、よはかはりたれとそらはおなしやうにそありけるとて

進

193 世中のありしさまにもあらねともそらはかはらぬはきのあさきり

むま

194 秋き、りもくもゐか、れるそらなれはつねより事にたちさわくへし

御

195 よのなかもさためなければこの秋もみねのあさきりたちやかはれる

(傍点筆者)

花山院は寛和二年六月二十三日花山寺に御出家になった。七月二十二日一条天皇即位。そのほとぼりのまださめやらぬ八月のことと推測する。花山院出家退位事件は、当然のことながら齋院にとつても、女房たちにとつてもよほど大きな衝撃であつたのだらう。それ故に秋霧の不穏な動きにも、世の変動と結びつけての連想を呼んだものと思われる。

また二四八番に

さゑもの家のふたか殿上のふたけつられてつかさなともとられん  
とすとき、て、ひとのいへはくら人のきぬはいたつらにそあらむ

里に下った女房から蓮の実が届く。早速返歌が詠まれ、蓮を水にむき入れると実が浮き上る。罪の意識・御仏への連想——見逃されがちなありふれた生活の中にも一つ一つに新鮮な発見があり、忽ち歌が生れる——。

さとよりさい将はちすのみまいらせたるをふみのなかにかきて

88 にこりにしけれぬたとひ思はすは身のゆくすゑはあはれならまし

かへしうきはのかたをゑらせ給て

89 にこりにもしまぬはちすとみつるよりつみうきはなるこ、ちこそすれ

これを水にむきいる、かうきあかれは進

90 のりのいけにおふるはちすのみとも哉つみのかたにはむけとうきけり

91 はちすゆゑいけのみくつはうかふともいとおみふかきそこはいかにそ

以上のような日常生活の中に文芸的雰囲気と態度があったといえる。

草深い紫野の四季はひとしお趣が深い。花の開くにつけ虫のすだくにつけ、また露のいとゞしく光を増すにつけ、それは全て実感としての詠作であつたことは言うまでもない。

注1「大齋院前の御集の研究」九〇頁に、齋院自体の神事奉仕の特殊性・地理的条件・

後見勢力・対外活動についての御指摘がある。

2 御拾遺集四〇番に「題しらず」として入集。

3 九一頁

## 五

永観・寛和の齋院文芸で見のがしてならないのは『前の御集』二八一番の螢合せ及び三八八番・三八九番の負態虫合せの歌合せともいべき催しである。

をなしころほたるあはせさせ給にむまかめのかたをつくりてこふにうす物をはりてかめにくはせたる、こふのうちにほたるこめて

281 きみか世をかめのをなしにみすとてやかはへのほたるひかりみすらん

「馬内侍集」との校異は前に示した通りである。「螢合せ」なる催しは文献的にこれが唯一のものと言われる。<sup>(注1)</sup>

かたわきてまけ物にはまつむしす、むしを八月のかうしんにいたさせ給、左すはうにいとをこくうすくそめてこのかたにむすひてしろかねこかねのすちやりてちむのすはまにうへたり、もの、はにかきつけたるは

388 としをへてくる秋ことにす、むしのよにふりかたきこゑもたかため

右は秋の、のかたをつくりてませゆひて水なとやりて、それにきり／＼すはなちたり、くちはのうちしきにあしてをかきて

389 さかりなる秋のよをへてきり／＼す□まさすくさのねたかく

このむしのすをないしのかむの殿にたてまつら□せ給に

390 ひとりしてき、ならしたるむしのねをあはれなりともたれにかたらむ

の、一時一時に集結される。生活の一こま一こまに新鮮味と興味を覚え即興の小さな歌会となる日々の連続であつたようだ。

「大齋院前の御集の研究」にも御指摘のあるところだが特徴的な場面として次の場面がある。五月雨のころのことであろうか。

六日あめいみしうふる、もりてれいはありともしらぬ御ゆふねを  
おまへちかうひきよせてもるところにすゑたるをこらんして

158 かつきわひなけな<sup>4</sup>のうらにみをすてしあまふねとこそいふへかりけれ  
とのたまはせて、ひとくつけよとのたまはすれば、こゝろく  
にいふ

進

159 おきところしらさりつれとこれによりうらみつ、よをうみわたるわか  
身をは

左門

160 たちまさるなみのたよりによるみれば（下句欠）

みなひとつつ、よむへしとおほせらるれば

さい将

161 あまふねよせつとならありもへてなそやうきよにこきははなれなん

院女房

162 たのめつ、なみこす人のあまたあれはた、みのうらにふねさへそよる

むま

163 あまふねのたよりならぬにさはりおほみあしのみきはをわけてこそく

れ

ゑもんめのと

164 よにふりてしつみをりけるあまふねをおくつなてのひきはいてつる  
すり

165 としをへてしつめるふねをしらなみのかゝるたよりにうちよするかな  
兵ゑおほむゆかりのもとちかけはなるへし

166 おとにのみき、わたりつるあまふねをうらはまゆふによするしらなみ  
167 いかなれはしつめるふねのこよひよりこのうらまでこきよりつらむ

雨漏りにつけても齋院のわびしい生活のほどがうかがえるが、満たされない生活上の悪条件を越えて女房たちの心を引き立て、普段は目にしたこともない、引き出された雨受けの湯舟を「海人舟」に見立てて、明るく即興の歌会に興ぜられる内親王であり、齋院女房たちの生活である。

また大雪の日、

をなし月の廿日、きたのたいこほちてそらもあらはなゆきふりい  
りて、をりのほりのわた殿、みちいといみしければ、えまうのほ  
らて進このゆきはいか、とて

333 かへるへきかたこそしらねこのゆきにこちこし道のあともまきれて

宰相

334 こしの道かへるの山もありといふをさてやは人のゆきとまるへき

北の対を毀して大雪が降り渡殿に降り積った雪にゆきなやむ——しか  
し、忽ちいまわしいこの雪も越路の雪に見立てられ、連想を呼び歌が詠み

齋院関係者以外の貴公子たちの訪問も稀で、『前の御集』にみえるのは左大将朝光、実方の少将（兵衛佐）、道綱の少将、左衛門督重光らに過ぎない。

それでは具体的にその生活を見よう。

『前の御集』二一―二五に次の歌がある。

かくてゆめに人まいりたりとみつみすかけかへよといふひとの  
21 ゆめにたにみすはこそあらめたまたれをひとまつ君にかけもかへなむ  
進

22 おもひつゝぬるはるの夜にゆめみすはかけても人をまたれさらまし  
なとくちすさむ、三日までまいる人ひとりなし、あさまじうもひと  
とのまいらてくれぬるかな、まいるへきひとやはある、いとおほ  
かる物を、なといふをきこしめして  
かすみをふかみとふ人もなしといふ事をよませたまふ

さい将

23 やまさとはふかきかすみにことよせてわけてとひくる人もなきかな  
24 かすみのみふかき山辺にいへるしておほつかなさをなけ<sup>（注2）</sup>るかな

きこしめしいて、

25 はるはまたかすみにまかふやまさとをたちよりとふひとのなきかな  
三日まで訪う人のない初春、山里の淋しさに人恋しい女房達、内親王から「か

すみをふかみとふ人もなし」の題が出され、女房たちは歌を詠む。夢にまで見る程の訪う人の無さの中にも、むしろ孤立した淋しさ故に自らを慰める糧としても又いつそう文芸的な面に傾かざるをえない要素があった。

四季折々の美に敏感な平安人の心にはその美しさの鑑賞されずして散りゆくことが惜しまれた。一八五・一八六に次の歌がある。

おなしころ御前のもみちいとおもしろきをくちをしう人もまいら  
てみぬ事なといひて 進

185 うきさとのきくみる人もなきやとのもみちやよるのにしきなるらん  
きくのかたはらにあればなるへし

むま

186 こさまさるもみちのいろもあるものをすこしうつろふしらきくの花  
この後に

十二日のさるのときはかりに院の殿上ひと廿よ人はかりつゝきて  
もみちみにまいりたり、うちさふらひのまへにたゝみしきてゐた  
り、くた物さけいたさせたまふ、とくちよりさかつきにもみちい  
れてさしいつとて

とあるのが、集団でここを訪れた唯一の記録である。歌の欠けていることが惜しまれる。

紫野の生活は、紫式部の言うようにたしかに宮廷のような人事のわずらわしさはない。必然的にその関心は選子内親王を中心とする身近かな生活

からせ給てふようなめりとたますれば」の詞書で、進、むま、御、大将の歌がある。  
5千載集九〇七「左大将朝光がちかことぶみをかきてかはりおこせよとせめはべりければつかはしける」の詞書で入集。

6天曆五・六年頃の出生と推定しての年令。

7三手文庫本による。

#### 四

『今昔物語』巻第十九ノ十七話「村上、天皇、御子大齋院出家」語第十  
七」に

齋院ニテ御マッ間、世ニ微妙ク可笑ク御マッ上達部・殿上人不絶ス参レバ院ノ  
人共モ緩ム事无ク、打チ不解ノ有レバ、齋院許ノ所无ク世ノ人皆云ケル  
とあり、これは前述の清少納言や紫式部らの生存した頃の齋院の盛時のさ  
まを伝えるものであるが、続いて時が移り齋院も老いおとろえ人々も訪わ  
なくなったころの紫野の有様を次の如く描写している。なお『無名草子』  
の「大齋院」の章にも同様の描写がある。

訪う人の少なかった初期の様は、むしろこの描写と相通うものが無かつ  
たろうか。

夜深更<sup>フケ</sup>人影<sup>モセ</sup>不<sup>セ</sup>為<sup>ス</sup>。東ノ屏ノ戸<sup>ヨリ</sup>入<sup>テ</sup>、東ノ対ノ北面ノ軒ニ密ニ居<sup>テ</sup>  
見<sup>レバ</sup>御前ノ前栽心ニ任<sup>セテ</sup>高ク生<sup>ジ</sup>繁<sup>タリ</sup>。疏<sup>ノ</sup>人モ无<sup>ニ</sup>有<sup>ト</sup>哀<sup>レ</sup>見<sup>ユ</sup>。露  
ハ月ノ光ニ被<sup>テ</sup>照<sup>サレ</sup>渡<sup>リ</sup>タリ、虫ノ音ハ様々ニ聞<sup>ユ</sup>。遣水ノ音<sup>ノ</sup>  
ニカ流<sup>リ</sup>タ其ノ程、露、人ノ音无<sup>シ</sup>。船岳下ノ風水<sup>ニ</sup>吹<sup>レ</sup>御前ノ御簾少シ打<sup>チ</sup>

動ニ付<sup>テ</sup>、董香艶<sup>エモイハ</sup>馥<sup>カウハシ</sup>氷<sup>ヒヤ</sup>氷<sup>ニ</sup>句<sup>ヒ</sup>出<sup>タル</sup>聞<sup>クニ</sup>御隔子<sup>ミカウシ</sup>被<sup>オロサレ</sup>下<sup>タラム</sup>此<sup>カ</sup>薰<sup>タキモノ</sup>  
句ノ花<sup>ニ</sup>聞<sup>バ</sup>「何<sup>イカ</sup>カルニ有<sup>ラム</sup>」思<sup>テ</sup>見遣<sup>ハ</sup>風<sup>ニ</sup>被<sup>フ</sup>吹<sup>レ</sup>御几帳<sup>ス</sup>裾<sup>ツ</sup>少<sup>シ</sup>  
見<sup>ユ</sup>早ウ御隔子<sup>モ</sup>不<sup>オロサレ</sup>被<sup>下</sup>有<sup>ケル</sup>也<sup>ケリ</sup>「月<sup>ナド</sup>御覽<sup>テ</sup>不<sup>オロサレ</sup>被<sup>下</sup>有<sup>ラム</sup>」思<sup>フ</sup>  
程<sup>ニ</sup>奥深<sup>シヨウコフ</sup>カニ箏<sup>ノ</sup>音<sup>ス</sup>少許聞<sup>ユ</sup>律<sup>ニ</sup>被<sup>タテラレ</sup>立<sup>テ</sup>平調ノ音<sup>ホソカ</sup>鬚<sup>ニ</sup>聞<sup>バ</sup>搔<sup>ウ</sup>合<sup>セ</sup>樂<sup>一ツ</sup>  
許<sup>バ</sup>有<sup>リ</sup>此<sup>レ</sup>聞<sup>クニ</sup>微妙<sup>メテタ</sup>事<sup>キ</sup>无<sup>限</sup>

(□のよみは梅沢本により補う)

と描写している。本の性格上信憑度に限界のあることを十分考慮しても、  
なお大かたのことの趣は伝えているものと思われる。

選子内親王の初期齋院、特に今ここに対象としようとする永観・寛和の  
ころは、紫野に入られて七・八年目にあたり、紫野の生活には御馴れにな  
り落着きを見せて来られた頃ではあったろうが、齋院という——内親王御  
自身が潔齋を保ち賀茂の神に齋く——職掌の特殊性とともに、内裏後宮と  
は違った人里離れた紫野に在るといふ辺鄙な地理的条件、そして更に未だ  
自他共に、中・晩年期のように道長の庇護にたより、或は時めく定子後宮、  
彰子後宮との積極的な交流によって時の権力への聡明な適応をはかりうる  
ような状況ではなかった。この時期は兄円融院の退位から花山朝、そして  
一条帝即位にかけての政権的にはまことに不穏な背景にあった。つまり後  
見勢力の微弱さがあげられよう。そして、選子内親王御自身、いまだ二十  
歳前後という若年でいらつしやり、御自身の社会的地位の確立の未だしき  
時代であつて対外的に働きかける力もなかったとみてよからう。

以上の如き条件のもと、初期齋院の生活は紫野にとけこんだ素朴なもので

次に示すのは、『馬内侍集』と『大斎院前の御集』所収歌との重なる四首の歌である。馬の詠作三首、宰相の作一首である。馬の詠作三首の重複は「馬」と後の「馬内侍」が明かに同一人物であることの一つの証である。

《大斎院前の御集》

十六日うつゑをちひさくつ

くりてまいらすとて 馬

51 なけきかとほと／＼おもふをの

、おとはいはひのつゑをきるに

そありける

かへし さい将

52 をの、おとをたつねさりせはは

まはききりけるつゑをいかに

しらまし

をなしころ月いとあかくて

草むらのなかにむしのこゑ

／＼なきてつゆはたまのや

うにみゆるほとにおもはし

きことなとやありけんむま

ひとりこつ

252 うきなたつそもあるよにきり

《馬内侍集》<sup>〔注7〕</sup>

さい院よりうつゑをたまへ

れは

77 なけきとそほと／＼思ふおの、

をとはいはひのつゑをきるにそ

有ける

返し

78 おの、をとまたつねさりせはは

ま椿いはひのつゑをいかてしら

まし

きりきりすのなきしをひと

りことに

53 なきなたつ袖もありしをきり

きりすくさつゆけしとなにかな  
くらむ

をなしころほたるあはせさ

せ給にむまかめのかたをつ

くりてこふにうす物をはり

てかめにくはせたるこふの

うちにほたるこめて

281 きみか世をかめのをなしにみす

とてやかはへのほたるひかりみ

すらん

／＼す草つゆけしと何か鳴らん

かめのかたをつくりてこに

うす物をはりて螢をいとお

ほくこめたりさふらふ人々

によませさせたまひし

142 君が代をかめのおなしに見すと

てや川辺の螢ひかりますらん

詞書の異同は、家集が後になって回想録風にまとめられたものであること及び『大斎院前の御集』が比較的時間的にも早くまとめられたものであろうし、半ば公的な性格をもった記録としてや、詳しく日記風にまとめられていることなどから来る相違であらう。

注1 前掲論文「大斎院前の御集の研究」

2 後拾遺集一〇三二「かたらい侍ける人のもとより世をそむきなんとありしはいか

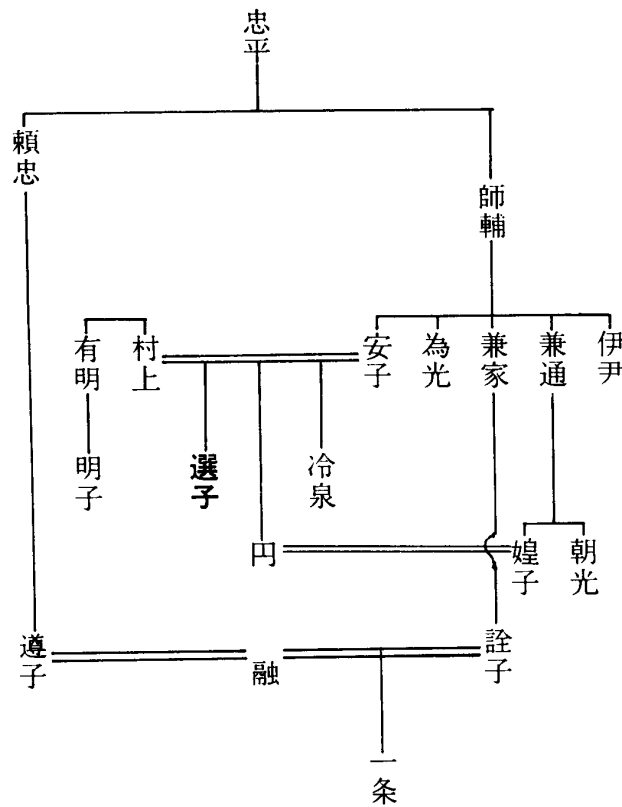
ゞといひおこせて侍りければ」の詞書で入集。

3 鹿児島県立短期大学紀要第二七号（一九七六・十二）

4 「五日（永観二年十二月五日）左大将との、ひめきみの御もきにかつけ物たてまつれさせたまはむとするにくる、までもすりのもをたてまつらねはこゝろもとな

おそむきえずにいる旨返したものであろう。

このころ馬内侍には恋愛関係にある男性として、皇子の弟朝光がいた。前述の歌との因果関係はさておくとしても、馬内侍が選子内親王に出仕した経緯については、拙稿「馬内侍私論——交遊を中心に——」<sup>(注3)</sup>にもふれておいたが、愛人関係にあった朝光の推挙によるものではなかったかと推定される。



すなわち選子内親王をめぐる右の系図にみるごとく、安子を母とする円融天皇や選子内親王と、安子の兄弟である兼通を父とする朝光や皇子とは従兄弟・従姉妹にあたり、また朝光の母明子女王は有明親王の女で、選子とはやはり従姉妹にあたるといふ血縁関係にあった。

『大齋院前の御集』二一〇―二一四にわたる、朝光の女姚子裳着への選子の心付けをめぐる歌の連作も、こうした血縁関係によるものとして首肯できる。<sup>(注4)</sup>

このような血族の誼から、姉皇子の没後後宮を下った愛人の馬内侍を、選子齋院のもとに出仕させることとなったのではなかったかと考える。朝光との贈答歌の中にも齋院時代のものと思われる

人をよせねはしゐていりきたるかわひしければちかことをたて、  
後にあはむとてやりたれは一日はかりありて

12いのりくるわかかたをかのちかことをそくた、すの神にも有かな  
返し

13逢ことをかたをかとのみおもふ身はなに、た、すの神にかくらん  
左大將ちかことふみををこせたまてかはりのふみをこせよとせめ  
たまひしかは

80ちはやふるかももの社の神もきけ君わすれすは我もわすれし<sup>(注5)</sup>  
などがあり、この時代は朝光との交際の続いていたことを示している。

『大齋院前の御集』には、馬内侍は「馬」の呼称で登場する。ここにおける女房としての「馬」の位置は、御集に見る限りでは、所収歌「進」の一〇八首「宰相」八四首について四二首あり、この三名が主な存在であつたらしく察せられるところからすれば、また年令的に考えてみても三十歳を越す頃のことであり、かなり重要な地位にあったことが理解される。<sup>(注6)</sup>

選子齋院に對して、清少納言・紫式部をして斯く書かしめたことは、當時選子内親王を中心とする齋院後宮が独特のみやびかな雰圍氣を擁するところとして当世人に認識され、皇后、中宮方後宮と並び立っていた実態を物語るものに他ならないであろう。しかしこの実情はいうまでもなく正暦、長保から寛弘期にかけてのことであり、選子も円熟期を迎えられてのことであつた。

馬内侍が選子齋院に仕えたのはこれより十数年前、永観、寛和のころの数年間と推測される。それは選子齋院が成長、確立されていく齋院文芸の前段階としての時期であつた。

注1他系統本「ましてこの頃はめでたし」。大系本補注に言うごとく他系統諸本本文を

とれば選子齋院を称讃したことになる。

## 2 岡崎知子前掲論文

3 詞書「選子内親王いつきにおはしましける時女房にもの申さむとて忍びてまゐりたりけるにさぶらひどもいかなる人ぞなどあらくまうしてとはせ侍りければた、うがみにかきておかせ侍りける」

4 今井源衛先生著『紫式部』五十一頁（人物叢書131、吉川弘文館）

5 寛弘元年四月二十日条。同二年五月五日条。同六年七月七日条。等

6 後拾遺集一一〇・一一〇二七、続後拾遺集五四一

馬内侍が選子齋院に仕えたことを示す重要な資料は、いうまでもなく『大齋院前の御集』である。秋葉安太郎・鈴木知太郎・岸上慎二氏の御研究により、この御集は大体永観・寛和を中心とする数年間の記録であることが略々明かになっている。選子内親王卜定後約十年、御年二十歳を過ぎられたころの、数年間の記録である。

馬内侍はそれより以前、円融皇后皇子に仕えたが、天元二年（979）六月三日皇子は薨去された。選子内親王が紫野院に入られて二年後のことである。

馬内侍が選子のもとに移った時期は定かでないが、常識的には恐らく皇子の没後程ないころと考えられる。因みに皇子に仕えていた「小馬命婦」は皇子の没後間もなく出家したらしい。その家集に

堀河の後うせさせ給へりし五七日七月七日にあたりければ元輔が言ひ

おこせたる尼になりたると聞て (二四二二六)

と詞書しての元輔との贈答がある。しかし馬内侍は出家せず、選子に仕えることとなつたわけだが、家集には次の歌があり興味深い。勿論くわしい詠作の背景については何もわからないので想像を逞しくしてのことである。

と私たちのもとよりあまになりなむとありしはいかにといひたれ  
は<sup>注2</sup>

4 しかしすかにかなしき物は世のなかをうきたつほとこの、ろ成けり  
「尼」に「海士」をかけて「浮き立つ」といい、まだ未練があつて今な

む。世にをかしき人の生ひいでは、わが院こそ御覧じ知るべけれ

(日本古典文学大系四九〇頁)

と強い自負心を見せる齋院女房に対する反撥、かねがね齋院方の歌をあま  
り上手とも思っていないし、女房とても中宮方に比べてさほど優れている  
とも思っていない紫女の自負心から出た私情をぶちまけたところなので、  
必ずしも彰子方を代表する見解というわけではなく、むしろ紫式部独自の  
見解と見るべきであろうが、齋院方の評価は、紫野という自然の情趣に恵  
まれたその立地条件の、宮廷との相違・俗事に多忙な宮廷後宮に奉仕する  
ものとの職務上の相違から齋院では風雅一すじの生活が出来るのだと主張  
する。すなわち、

をかしき夕月夜、ゆゑある有明、花のたより、時鳥のたづねどころに  
まゐりたれば、院はいと御心のゆゑおはして、所のさまはいと世はな  
れかんさびたり。またまぎることもなし。うへにまうのぼらせ給ふ、  
もしは殿なむまゐり給ふ、御とのみなるなど、ものさわがしきをりも  
まじらず、もてつけ、おのづから知りこのむ所となりぬれば、艶なる  
ことどもをつくさむなかに、なにの奥なきいひすぐしをかはし侍らむ。

(日本古典文学大系四九〇頁)

と。また、

されど、内わたりにて、明け暮れ見ならし、きしろひ給ふ女御后おは  
せず、その御かた、かの細殿と、いひならぶる御あたりもなく、をと  
こも女も、いどましきこともなきにうちとけ、宮のやうとして、色め

かしきをば、いとあはあはしとおぼしめいたれば…(中略)…中宮の  
人うもれたり、もしは用意なしなどいひ侍るなるべし。

(日本古典文学大系四九一頁)

と、色めかしさを浮薄なこととする中宮方の気風・認識と自由な齋院方の  
趣との相違を述べ対抗意識を露にして中宮方の擁護に努めている。

当時の事として『金葉集』<sup>(注3)</sup>には紫式部の弟惟規が齋院の女房に逢おうと  
して忍んでとがめられた話が物語めかして語られ

神垣は木の丸殿にあらねども名のりをせねば人とがめけり(五八三番)

と詠んだことが見え、『今昔物語』<sup>(注4)</sup>巻二十四ノ五十七話にもこの話が見える。  
これは惟規の「現世的な耽美的享樂者」<sup>(注4)</sup>だった性格にもよることながら、  
時代を十数年遡らせてみても、『馬内侍集』所収歌の中にも齋院時代の詠と  
みなされる朝光をはじめ何人かの男性との恋愛歌がみられることも思い合  
せられる。齋院側には元来そうした気風があったのだろう。

さて、寛弘以降のことになるが、彰子と選子の親しい御交友のあった事  
は、『御堂関白記』<sup>(注5)</sup>その他『栄花物語』(衣珠)・後拾遺集・続後拾遺集等<sup>(注6)</sup>に  
見える贈答歌などによって知られることは、岡崎氏の御研究に述べられた  
通りであり氏はその交友に対する見解として、次の如き卓見を示しておら  
れる。

彰子の背後にはその後見者たる道長があつた事を考慮しなければなる  
まい。選子はむしろその道長への心づかいからこの年若い中宮に対し  
て特別の好意を示したもののようである(後略)

として清少納言は注目している。

これはおそらく清少納言の定子後宮出仕体験及び選子齋院に対する定子後宮の認識、また自ら耳に入る世評などから、かく言わしめたものと思う。定子後宮に於ける選子齋院に対する認識が如何なるものであったかは、定子皇后と選子内親王の交友の程を示す『枕草子』八十六段のいわゆる「雪山の段」の一節によってよりよく窺い知ることができる。

先学のすでに述べられるところではあるが、引用しておきたい。長徳五年（999）正月二日（正月十三日改元、長保元年となる）の朝のことである。

局へいとく下るれば、侍の長なる者、袖の葉のごとくなる宿直衣の袖の上に、あをき紙の松につけたるを置きて、わななき出でたり。「それは、いづこのぞ」と問へば、「齋院より」といふに、ふとめでたうおぼえて、とりてまゐりぬ。

まだおほのごもりたれば、まづ御帳にあたりたる御格子を、碁盤などかきよせて、ひとり念じあぐる、いとおもし。片つかたなればきしめくに、おどろかせ給ひて、「などさはすることぞ」とのたまはすれば、「齋院より御文のさぶらはんには、いかでかいそぎあげ侍らざらん」と申すに、「げに、いと疾かりけり」とて、起きさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌ふたつを、卯杖のさまに頭などをつつみて、山橘・日かげ・山菅など、うつくしげにかざりて、御文はなし。ただなるやうあらんやは、とて御覧ずれば、卯杖の頭つつみたるちひさき紙に、

山とよむ斧の響を尋ねればいはひの杖の音にぞありける

御返し書かせ給ふほども、いとめでたし。齋院には、これよりきこえさせ給ふも、御返しも、なほ心ことに、書きけがしおほう、用意見えたり。御使に、しろき織物の単、蘇枋なるは梅なめり。雪の降りしきりたるに、かづきてまゐるもをかしう見ゆ。そのたびの御返しを、知らずなりにしこそくちをしけれ。

（傍点筆者 日本古典文学大系一三一―一三二頁）

両者の関係を記したのは枕草子ではこのくだりのみであるが、折にふれ事につけて折過さぬ選子の心憎いまでのみやびの程がしのばれると共に、「齋院より」ときいて「ふとめでたくおぼえ」た清少納言の感慨、御返事をしたためるに当たっても殊に心用意せられる定子の様子から、選子に対する中宮の、また中宮方の意識、態度といったものが窺える。一般に、選子齋院と定子後宮とは互に敬意をもった交際であったと言われている所以である。

清少納言の前述のくだりから約十年後、紫式部はその日記に清女とはかなり異った観点から齋院への見解を記した。いわゆる消息文といわれる部分の「齋院に、中將の君といふ人侍るなり」のくだりである。

こっそり見せてもらった文が、気がねのない私の文にもせよ、その書きぶりが余りにも思い上ったものであったために不愉快で腹立たしく、そのうえ

歌などのをかしからむは、わが院よりほかに誰か見しり給ふ人のあら

歳頃にかけての数年間の記録——に四十六首、後期の五十一歳〜五十五歳頃にかけての数年間の記録である『大斎院御集』に約十八首、その他『栄花物語』『大鏡』等にも若干の贈答歌が現存する。

五十七年にわたる斎院在任中和歌の道に精進され、定子後宮、彰子後宮に並び、斎院文芸発展の原動力となったことは言うまでもない。

因みに『和歌色葉』は「名譽歌仙、貴女二十人」の一人に数え、今昔物語巻二十四ノ五十七話には「今、昔、大斎院ト申ス（中略）和歌ヲ微妙ク読セ給ケル」と語られている。

注1 「日本紀略」康保元年四月廿四日己巳。中宮座 皇女選子<sup>一</sup>。

2 「日本紀略」天延三年四月三日乙巳。前女御從三位藤原懷子薨。年四十。皇太子并<sup>皇女</sup>齋院母也。仍齋院退<sup>一</sup>出東院<sup>一</sup>。

3 「日本紀略」天延三年六月廿五日丙寅。ト<sup>ニ</sup>定賀茂齋王<sup>一</sup>。先朝第十選子内親王也。以<sup>ニ</sup>陸奥守貞盛二条万里小路宅<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>潔齋所<sup>一</sup>。

4 「日本紀略」貞元二年四月十六日丙午。賀茂齋院選子内親王從<sup>ニ</sup>大膳職<sup>一</sup>。禊<sup>ニ</sup>東河<sup>一</sup>。入<sup>ニ</sup>紫野院<sup>一</sup>。（中略）中納言為光為<sup>ニ</sup>前驅<sup>一</sup>。

5 円融院は選子の兄。花山・一条・三条帝は甥に当る。また後一条帝は甥一条帝の皇子である。

6 「日本紀略」長元四年九月二十二日丁卯。夜賀茂齋院選子内親王依<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>老病<sup>一</sup>。私以退出。天長八年有<sup>ニ</sup>此例<sup>一</sup>之由。外記勸<sup>ニ</sup>申之<sup>一</sup>。

7 「日本紀略」長元八年六月二十二日甲戌。前齋院一品選子内親王薨。年七十二。

（左経記・大鏡裏書）

8 頼道は兵衛佐に任ぜられたことはなく不審。仮りに右近少将に任ぜられた長保五年頃のことと解すれば頼道は十一才で「いと小さく」の本文にも合致する。

9 栄花物語「はつはな」によれば寛弘七年のこと。しかし『御堂関白記』寛弘七年四月廿五日条には「見祭還、若宮出給」とあつて敦成親王のみの見物となつており、二人の皇子と祭見物した記事は『御堂関白記』寛弘八年四月十八日条に見える。「暁從内若宮（敦成）・三宮（敦良）尚侍（妍子）同道御一条家散敷室……」

10 長和元年閏十月二十九日条・長和二年四月二十一日条・長和四年四月二十一日条・寛仁元年七月二日条・寛仁二年閏四月二日・三日条等。

岡崎知子氏前掲「大斎院選子の研究」に論ぜられる。

11 「大斎院選子の研究」（『平安朝女流作家の研究』138頁）また杉谷寿郎氏も前掲論文に選子と定子・彰子・道長との関係について「追從深き老狐」といった追從の姿勢ばかりではないようであり、再考あるべき問題」とされる。

## 二

『枕草子』『宮仕所は』の段に

宮仕所は内裏。後の宮。その御腹の一品の宮など申したる。齋院、罪ふかなれどをかし。まいて、よの所は<sup>（注）</sup>。また東宮の女御の御かた。

（日本古典文学大系三二八頁）

と、理想的な女の宮仕え所をあげた中に、齋院は内裏・後宮につぐよい所

条・三条・後一条の五代、五十七年間の長きにわたり、実に七十二歳の生涯の大半を齋王として紫野の院に過されたのである。

その御人柄については、必ずしも若き日の選子内親王を語るものではないがその一端をみると『大鏡』師輔伝に

いつきの宮よにおほくおはしませど、これはことにうごきなく、よにひさしくたまちおはします。ただこの御一すぢのかくさかへたまふべきとぞみ申。むかしの齋宮・齋院は仏経などのことはいませ給けれど、この宮には仏法をさへあがめ給て、あさごとの御念誦か、せたまはず。ちかくは、この御寺のけふの講には、さだまりて布施をこそはをくらせたまふめれ。いと、うより神人にならせたまひて、いかでかゝる事をおぼしめしけんとおぼえさぶらふは

とあり、仏道への信仰の篤かったことが述べられている。続いてさりとして又、現世の御栄花をと、のへさせたまはぬか。御禊よりはじめ三箇日の作法、出車などのめでたさ、おほかた御さまのいと優に、らう／＼じくおはしましたるぞ。

と、後世を願う仏道信仰に志ふかといえ、一方現世の栄花についてもよく考えておられた旨、賀茂の祭をはじめとしてあらゆる面に優雅でまた才智に富んだ御振舞をなさる御方であられたと語る。そして道長を感心させた二つの挿話が続く。

一つは、兵衛佐頼通が御禊の前駆をつとめた時、年少のため紫野の本院まで供奉せず賀茂河原から退出したが、咄嗟のことで祿の用意の無かった

選子は、頼通をお召しになり対面して、御着用の小袿を脱いで被けた話であり、今一つは、賀茂の祭に道長が敦成親王（後一条）、敦良親王（後朱雀）の御二人を膝にお乗せして齋院の行列が棧敷の前を通過する時「このみやたちみたてまつらせたまへ」と申したところ、齋院は御輿の帷から赤色の扇のつまを差し出してみせたという話である。後者には、道長や人々が感嘆し合ったがひとり没落した中関白家の隆家のみは「追従ぶかきおいぎつねかな。あな愛敬な」と毒舌をはいた旨記される。いずれも選子内親王の優雅さ聰明さを伝えるものであるが、道長に批判的な隆家の登場するくだりは端無くも摂関政治という社会的背景とのつながり、選子内親王の処世の一端を示す一場面でもある。晩年における道長とのかなり親しい私的な交渉のあったことは『御堂関白記』によりすでに知られるところであるが、馬内侍のお仕えした前期齋院時代にはかゝらないので省略する。が、ともあれ結論的には岡崎知子氏も言われる如く摂関体制の中で齋院として独自の社会的地位を保つためには、血族であり最高権力者であった道長を唯一の頼りどころとしていくより他なかったのであり、また賢明な適応でもあったと言えよう。

次に歌人としての選子内親王をみると、拾遺和歌集以下三十七首の勅撰入集歌人であり、家集として、求道の至誠と情熱を窺える法華経の妙理を詠み込んだ『発心和歌集』（五十五首所収）を残しておられる。

また齋院サロンの記録としての『大齋院前の御集』——二十一歳―二十三

## 馬内侍 (三)

——その育まれた文芸的環境を中心に——

福井 迪子

「馬内侍」(一)「くろしお」VOL.2 No.2 五十一年十二月、(二)「人文」創刊号五十二年十二月)では、馬内侍の現存歌と当代の評価、家系、幼くして齋宮女御のもとに仕えたこと、及び、次いで出仕した円融院後の皇子後宮——歌人としての素地の培れていったであろうその後宮——の文芸的雰囲気などについてふれた。

小論では引続き、皇子の没後出仕し、数年間を過したと考えられる初期選子齋院での生活を、紫野の、神に齋くという特殊な環境におけるその文芸的雰囲気を中心に、主として『大齋院前の御集』により、先学の御研究<sup>(注1)</sup>に導かれつつ考察することを旨とするが、なお選子内親王について、また選子齋院に対する、文献に残る当代人の認識等についてもふれる。

「馬内侍歌日記」の別名をもつ『大齋院前の御集』の存在は、この期の「馬」を知る上に誠に貴重な資料である。

注1 ○秋葉安太郎・鈴木知太郎・岸上慎二「大齋院前の御集の研究」(日本大学創立記

念論文集第一卷人文科学編)

○杉谷寿郎「大齋院とその家集」(言語と文芸)昭和四十年一月)

○岡崎知子「大齋院選子の研究」(大齋院選子における神と仏)、『平安女流作家の研究』所収 昭和四十二年八月発行 法蔵館)

### 一

第十六代賀茂齋王であつた大齋院選子内親王は、康保元年(964)四月二十四日、村上天皇第十皇女として誕生された。母は、この御産により間もなく薨ぜられた中宮安子である。

内親王は、御兄円融天皇の御代、天延三年(975)四月三日母懷子(冷泉女御)の薨去による尊子内親王の齋王退下により、同年六月二十五日賀茂齋王に卜定された。時に御年十二歳であつた。そして翌々年の貞元二年(977)四月十六日、十四歳で紫野院にお入りになられたが、爾来、度々の御代替りにも、それぞれの天皇とは極めて近い肉親関係に當つていた関係上改められることなく、後一条天皇の長元四年(1031)九月二十二日、御年六十八歳で老病により自ら退出されるまで、円融・花山・一